

2004年度第1回物学研究会レポート

**「世界を刺激する発想の原点」**

千住 博氏（日本画家）

2004年4月9日



**BUTSU GAKU**  
物学研究会  
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

2004年度最初の物学研究会は東京、NYを拠点にグローバルな活動を展開されている日本画家の千住博氏を講師にお招きしました。千住博氏の創作の原点、また日本画の可能性、日本人の美意識、NYを創作拠点に置かれている理由など、先生の最近の作品やご活動を通して、お話しいただきます。以下はそのサマリーです。

## 「世界を刺激する発想の原点」

### 千住 博氏（日本画家）



千住 博氏

### ニューヨークを拠点とする意味

私はニューヨークに住んで12年、永住権ももっています。1年のうちで300日はニューヨークで活動し、日本はせいぜい30日、40日滞在するという感じです。私が本来の自分を取り戻すことができるのはニューヨークのアトリエに居るときです。私にとってニューヨークは、譬えるならば「良い畑」です。豊かな栄養が入ってきて、光が差し込んできて、水が十分あって、良い土がある。ここで、おいしい果物や野菜、つまり私の作品は育まれます。自宅はアトリエからクルマで40分ほどのところですが、毎朝アトリエに入るときにはワクワクドキドキしています。

現在、日本には世界的に活躍されているデザイナーや建築家がたくさんいて、東京も刺激的な都市だとは思いますが。しかし、ピュアアートの世界となるとやはりニューヨークが中心です。ところが不思議なことに、ここで活躍している作家たちの多くは中近東やアフリカ、アジアの出身で、アメリカ人アーティストはむしろ少数派です。世界中からいろんな人たちがニューヨークにやってきて、互いに刺激し合い、創作の栄養分になっているのです。

けれども刺激は創作の要因の一つにすぎないと、私は思っています。もっと大切なことは古典から学ぶこと、つまり古いものから現在に通じる何かを見つけることだと考えます。例えば、国宝の普賢菩薩像と15世紀のボッティチェリの『ヴィーナス誕生』に描かれている「花」はそっくりです。これ

は何を意味しているのでしょうか？ このように古典を学んでいると、現在に通じる美しい形には洋の東西を問うことのない、人類の根源にある共通項を発見できます。古典を学ぶことは、過去から現在に通じる形を見出すことによって未来を見失わないようにすることなのです。

そういう意味でのニューヨークは恵まれた場所といえます。この街にはたくさんの美術館があって、世界最大級のコレクションを誇っています。アメリカは建国200年余りの国ですが、ニューヨークは莫大な古典に囲まれています。そして人間もアートも世界中から集まっていますが、お互いに個性を主張し合いながら調和を保っている・・・この街は異文化共生のひとつのあり方を現しています。けれどもここで生き延びるためには健康が第一です。夏は40度、冬はマイナス20度にもなるこの街で、作品を創作し発表し続けるには精神的にも肉体的にも健康でなければやっていけません。

## 美が人間を作った

私はニューヨークや東京以外にも世界中を放浪します。そしていつも感じるのが「その地元の食べ物が一番おいしい」ということであり、「人間は結局みんな同じなんだなあ」ということです。日本の「和花」を例にしてみましょう。和花の美しさは日本人だけでなく外国人も理解します。たぶん世界中の人はみなその美しさを理解するでしょう。しかし和花を作っているのは紛れもない日本の文化なのです。こうみると文化はいわば「方言」、ある種の「言語」であり、つまりは「ツール」と言えます。しかしその内容は人類普遍的「真理」なのだと思います。そうでなければ、世界中の人がピカソやマチスを理解し、ベートーベンやバッハの音楽を聴くことはあり得ないですから・・・。この話を掘り下げていくと「美」という概念は何かという問いに辿り付きます。美とはいったい何なのでしょう？

「美しいと感じ取る心」だと私は思います。美とは存在するものではなく、美しいと感じられる心があるかどうかです。つまり「想像＝イマジネーション」の産物です。一方、「創造＝クリエイション」は物を作ることであり、これは作る側の技術が大きく関係してきます。ですから「美」というものはイマジネーションの領域であり、すべての人が共有できるものです。美という認識があって創造が生まれると私は考えています。

では、人類はいつごろから「感じる心」を持っていたのでしょうか？ 私たちが最初に頭に思い浮かべるのは今から1万5千年前に描かれたアルタミラの洞窟壁画で、造形芸術の原点と言われています。実は洞窟壁画というものは4万年から3万年くらい前のものも存在しています。しかし今日はアルタミラの壁画についてお話ししましょう。

西ヨーロッパには現在280余りの洞窟壁画があり、主にクロマニヨン人によるものです。私たちは壁画とは壁に描かれているものと思っていますが、実際には天井に描かれているのです。さらに牛は牛の形をした石に、鹿なら鹿に似た岩に描かれており、色も本物そっくりに描かれています。ここでは面白いことが想像できます。一つは星座との関連性、天体の運行や宇宙との繋がりです。古人は暗闇の中で、神なる天空について豊かにイマジネーションを膨らませて描いていたのではないのでしょうか？ 最近の調査では、描かれている動物にひとつの共通項があることが分かってきました。それは動物の角や牙がそろって三日月の形をしているということです。彼らは月の神秘を知って

おり、28日周期で満ち欠けする月の運行を観察して、生命の再生や消滅、地球上の生き物の神秘を絵に込めていたのではないかとことです。さらに動物を天井に描きながら、何事かをやっていたに違いありません。絵は洞窟の中のとて大きな空間に描かれています。多分、大空間に大勢の人が集まって、ある人が絵を描いた。そのときに発する音は人類最初の音楽となり、楽器となった。他の人たちはその音にあわせて舞踏のようなことをしていたのではないかと……。そうしたことが渾然一体となって、ある種の総合芸術になり、神々への交信の手段やメッセージに昇華していったのでしよう。このように1万5千年前までは神々の領域であった「美」が、単に絵を描くおサルさんであった古代人を人類に引っ張りあげてくれたのです。つまり人間が「美」を作ったのではない、「美」が人間を作ったのです。美こそが未開の領域でうごめいていた人間の祖先を明るいところに引き上げてくれたのです。人間が先か美が先か……。もちろん美が先でした。

多分、人類はもっと古くから、道具を使い出した頃から、ある種の美意識を持っていたに違いありません。そして、美の起源は、「火の発見」と同じ時期、つまり70万年くらい前までさかのぼるのではないのでしょうか？ 洞窟の中でゆらゆらと揺らめく炎が岩陰にあって陰影を生み出す。そんな中で人類の祖先たちは美の意識を芽生えさせ、気の遠くなるような年月をかけて育んできたのでしよう。そして今、私は「美」に関わる仕事をしています。しかし美の変遷を辿って来ますと、現代において、「美」や「アート」は別の視点から考えるべきなのかもしれません。つまり、美を感じる事が人間の本能であるならば、美を見失った人類は結局のところ滅びていくのだと思います。つまり美を感じ取るイマジネーションの力が生命にとってどれだけ重要な意味を持っているのか、ということです。21世紀にはこうした豊かなイマジネーションが、少々飛躍してしまいますが平和へのメッセージになるのだと思います。美やアートは何のためにあるのか、それは人が幸福になるため、地球の平和のためにあるのです。

21世紀を迎えて間もない今、私はニューヨークにいて、改めて「美」を直視せざるを得ない時代が目前にあることを痛感します。20世紀に入ってショックやセンセーショナルからアートを作ってきた現代アーティストたちの中には同時多発テロというショックを通過して、自分たちの取り組みに嫌気がさして筆を折る人がたくさん現れました。ニューヨークを拠点としている私はこうしたアートの大きな方向転換を身近に感じ取っています。

## 京都大徳寺聚光院の襖絵に取り組む

さて、こうした時代の変わり目、20世紀から21世紀にまたがる時期に私は京都大徳寺聚光院の襖絵を描き上げました。聚光院には二つのお茶室があり、お茶の世界から見ますとここはまさに聖地のような場所です。なぜなら千利休から始まり、三千家代々のお墓を奉っているのがこのお寺だからです。このような場所ですから、私は大変な名誉と同時に大きな緊張感も感じました。

この聚光院別院のお茶室は建築家の吉村順三氏の遺作であり、一の間、二の間と茶室が隣り合わせであります。なぜ二間なのか、ここからの話は私の想像ですがお聞きください。茶の湯が確立したの戦国時代です。当時の武将たちは生死の狭間で生きており、そんな状況の中で静寂な茶室に入って一服のお茶をいただくという行為は、まさに生を実感する貴重な時間であったのでしよう。このように当

時を想像していくと、吉村順三氏は、「生」と「死」の茶室を隣り合わせに配置することによって、非常に精神性の高い、宗教的色合いの濃い空間を創造しようとしたのではないかと試みたのではないかと。ここまで来て私は2つの茶室の襖絵のテーマをそれぞれ「生」と「死」と決めました。

「死」を表現するために「究極の乾いた風景」を描こうと考えました。そしてリビアの砂漠まで出かけていきました。そこはエジプトから8時間クルマに揺られてオアシス都市にたどり着き、さらにジープに乗り換えてさらに5時間内陸に入って行った全く人の気配がない、まさに「死の世界」でした。ところがここで私は予想外の体験をしました。それは顔から汗が吹き出てくる、少し歩いただけで息が切れてハアハアし、心臓の鼓動までも激しくなり・・・いやが上にも自分の生を実感せざるを得ないという体験でした。

さらに、砂漠の荒涼とした風景は宇宙を思わせるに十分であり、自分が壮大な宇宙の、地球という惑星に生まれてきたこと、地球に引力があるからこそ宇宙空間に投げ出されないで生きていけるのだという感謝の気持ちが体の中心から湧いて出てきました。そして砂漠の渇きの中で、水を飲んで喉を潤すときの喜びは言葉にできないほどでした。このような経験を通して、私は砂漠こそが生の風景である、自分の生を自覚できる場所であるという思いを強くしたのです。

この旅ではベトウインのガイドと2人で行動していました。旅の途中で彼はやぶれた一畳半くらいのじゅうたんを敷き、真っ黒に焦げたやかんで湯を沸かし、欠けた茶碗にお茶を入れて振舞ってくれました。ほどなく私はこれがベトウインのお茶会であると気づき、さらに千利休が言っているお茶の美学 日常の何気ないものに美意識を感じることを認識しました、千利休のお茶もベトウインのお茶も共に日常に潜む尊い時間であり、美なのだ・・・。テーマでの一つである「生」は決まりました。

さて、もう一方の「死の茶室」はどうするか。私は中国の古い画論を思い出しました。そこには、風景には4つの段階があると記されています。一番目は「行ってみたい風景」、二番目は「遊んでみたい風景」、三番目は「住んでみたい風景」、四番目は「死んでも良いと思う風景」。つまり中国の画論の言う究極の風景とは「死後の世界」なのです。それは生まれてくる前に見た風景かもしれないし、ある種の楽園、パラダイス、ユートピア、桃源郷なのではないか。1500年も前の中国の画論は、究極の風景は死を暗示する、究極の美は死を感じさせると説いていたのです。

このように想像を膨らませていくと、結局、死も美も神の領域であるということです。そこで私は、死の世界を圧倒的に美しい色彩で描き、題材には洪水を選びました。ノアの箱舟、ダ・ヴィンチの洪水のスケッチなどなど、古今東西「洪水」というモチーフは人類に警鐘を鳴らすという点で共通しています。圧倒的な色彩によって洪水を描く・・・こうして「死」も決まりました。

聚光院には2つの茶室以外に本堂、座禅室、書院があり、各部屋の襖絵も私が描きました。本堂には「滝」を描きました。滝には生と死、希望と絶望などの二律背反するさまざまなモチーフが含まれています。一方、滝は古今東西で共通して「神のおわすところ」「神そのもの」と信仰を集める神聖な場所とされています。座禅室には、地球と月の引力から導かれる「タイド・ウォーター」を描き、お寺全体の要の場所である書院には「龍」を描きました。「龍」こそ、人間のイマジネーションの産物です。私が人間にとってもっとも重要だと考える「想像力=イマジネーションの産物」を寺の要の部分に描くことによって、大徳寺聚光院の襖絵は完成しました。そして今私は、6月2日から日本橋高島屋で回顧展のために、氷河をテーマとした新作を描いています。

## 紅梅白梅図の解釈

さて、ここからスライドを交えて、尾形光琳の『紅梅白梅図』に続き、私の作品についてお話して参ります。

私は『紅梅白梅図』の中に、「日本の美」「日本の文化」とは何ぞやというテーマが凝縮されていると思っています。この絵は中央に川が流れ、右側に若い紅梅が、左側に老いた白梅が描かれています。そして背景は金色（つい最近まで金箔と信じられていて実際にそうではなかったのですが）、川は銀色で着色しています。日本画の決まりでは金色は昼間を銀色は夜を表現しますので、この絵は右から昼、夜、昼と時間が経過していると読み取ることもできます。昼と夜、若い梅と老いた梅、そして川の流れ・・・と想像していくと、この『紅梅白梅図』は「時の流れ」を主題にしているのではないかと思いに至ります。同時に、日本独特の「無常観」を表現しているのだと私は思うのです。

この絵を具象と象徴の融合の作品であるとおっしゃる人がいます。確か的那样かもしれませんが、私はこの絵は現実を描いているのだと思います。時の流れ、昼と夜、若さと老い、これらの中にある喜びや悲しみ、人間の内面や外面、そういった現実の一切がこの絵には凝縮されています。まさに日本美術の究極がここにあると考えます。

## 作品解説

さて、ここから私の作品について時代を追って、簡単にご説明いたします。

まず、学生時代の作品です。この頃のテーマは「時の流れ」でした。絵画では動きそのものは表現できませんが、高速で動いているものを一瞬で切り取って画面に定着させる、そうした手法をとることによって、絵画を現代アートに昇華できるのではないかと考えていました。このテーマを発展させて卒業制作へとつなぎました。

次が『フラット・ウォーター』です。ハワイのキラウエア火山を描いたもので、150号（180×227cm）という大作です。またアメリカでのデビュー作品で、現在の私の基礎となっているといっても過言ではありません。これをアメリカで発表したときには、現地で大きな反響を呼びました。そこには幾つか理由があったと思います。一つは、当時のアメリカ人は日本画というと浮世絵や極度に装飾的な襖絵、あるいは墨絵を連想していました。ところが『フラット・ウォーター』は、今までの日本画の範疇では理解できない作品であったこと。彼らはこの絵が天然の紙に描かれており、絵の具も天然のかわを溶いたものだというのにすごく驚いたわけです。もう一つは、欧米人は白と黒は色ではないと思う節があるのですが、この絵によって、白も黒も豊かな色彩の一つなんだと認識したようです。さらに彼らはこの絵によって「余白」について、既存の概念を変えざるを得なかった。西洋絵画において余白は単なる塗り残しでした。ところがこの絵では、上部分の余白は曇り空を表し、下部分はその空を映した水溜りや海なのです。全ての生命は海から誕生し、その海を作ったのは雨を降らせた雲であるわけです。こうして、この絵の真意を理解したとき、欧米人は同時に余白の美と意味を悟ったのです。

その後、圧倒的な評価をいただいたのが『ウォーター・フォール（滝）』です。私は先の『フ

ラット・ウォーター』を発表した後にスランプに陥りました。それは『フラット・ウォーター』の評価が当時の私には荷が勝ちすぎているからです。32, 3歳だったと思いますが、ひどく落ち込んで、出口を見出すためにもう一度勉強し直そうと日本の詩歌を学びました。なぜなら、私は日本人で日本語によって物事を考えます。日本語で考えられた文化のことを日本文化というのだと思います。松尾芭蕉は随筆『笈の小文』の中で「風雅におけるもの造化にしたがえて四時を友とする」と言っています。これは現代風に言えば「水が流れたら、その流れた形に美しさを見出しなさい」ということです。要は自然が作り出した形をきちんと理解しましょうということです。また紀貫之は「花実相兼」と言い、表現行為における技術と内容の一致が大切だと遺しています。歌人である藤原定家も心と言葉の一致を説き、技術としての言葉の大切さを言っています。彼らは、技術と内容が一致したときに初めて表現は完結するのだと悟ったのでしょう。

あるとき、私は滝を描いた。自然の滝は水が上から下に流れるもの、・・・であれば絵の具を上から下に流してみる。これは芭蕉が言った「造化」に通じるのではないかと考えたのです。そして自然に流れた形そのものに美を見出していく。これこそが、技術と内容、言葉と心が一致する「花実相兼」ということなのではないか、と。『ウォーター・フォール』はこうして誕生しました。私はこのときにとんでもないモチーフに出会ったと感じ、自分の絵の中に全ての答えが入っていたことに驚きました。そして、この作品は95年のヴェネチア・ヴィエンナーレで東洋人としては初めて絵画部門の優秀賞を得ました。欧米人の中には、広島原爆雲にたとえた人、神を感じ取った人など、この絵を通して地獄を感じた人から天国を思った人まで、実に幅広くさまざまな印象をもってくれました。そのときに私は改めてアートが豊かなイマジネーションそのものであることを再確認したのです。その後、『ウォーター・フォール』はエアブラシを使ったり、絵の具の白と黒を反転させてみたりさまざまな技法を研究しながら表現の可能性を探っています。そして、先ほどご説明をした大徳寺聚光院の壁画へと繋がっております。今、6月開催される初めての回顧展に向けて、また新たなアートの可能性、イマジネーションの世界を探っている最中です。ありがとうございました。

以上

## 講師略歴

千住 博（せんじゅ・ひろし）氏

1958年東京生まれ。

1982年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業、87年同大学院博士課程修了。

1995年創立100周年の第46回ヴェネチア・ヴィエンナーレで東洋人として初めて絵画部門優秀賞を受賞。その後は世界を舞台に目覚ましい活動を展開。

主なものでは、2000年「両洋の眼・21世紀の絵画」展にて河北倫明賞受賞、2002年大徳寺聚光院別院の襖絵初公開、2003年ロイヤルコペンハーゲン社より千住博コレクション刊行など。

現在ニューヨークを拠点に活動。

2004年度第1回物学研究会レポート  
**「世界を刺激する発想の原点」**  
千住 博氏（日本画家）

---

写真・図版提供

; 物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

[物学研究会レポート]に記載の全てのブランド名および  
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。  
[物学研究会レポート]に収録されている全てのコンテンツの  
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1999 ~ 2004 Society of Research & Design. All rights reserved.